

# ドイツ語構造把握の諸相

—学習の現場ノート— (4)

Aspekte des Begreifens von der Struktur der deutschen Sprache

—Anmerkungen an Orten des Lernens— (4)

宮 永 義 夫

Yoshio MIYANAGA

## 1. 代名詞の構造

### 1. 1. 代名詞のブロック

筆者は先行する『ドイツ語構造把握の諸相 —学習の現場ノート— (3)』<sup>1)</sup> (以下『(3)』とする)において、通常用いられる冠詞等の16枠の曲用表は、ある一つのレベルの表現に過ぎないことを述べた。そのレベルの最大の学習ポイントの1つは、複数においては性が区別されないことである。それは性・数が同一平面上にあることを意味する。性と数は一続きの概念であって、単に名詞が4種類あるだけのことである。しかしその中の1つ(すなわち複数形)は、他の3つのいずれかと連関するものが大多数であるなど、表面近くにその差異がすでに見え隠れする。

3人称代名詞や指示代名詞(定冠詞)では更に、女性と複数の類似が問題になる。双方とも主格・対格ではsie/dieであり、同型である。これを区別するのは3性×2数×4格=24枠のレベルであると言える。これを16枠のレベルで見れば、つまりsie/dieは1つのものである。格変化を見れば、3格において、女性:ihr、複数:ihnenで異なっているから、違うものだと言うことはできる。しかし、格系列で違うパターンになるとは言っても、これは「それが、そのの、それに、それを」といった膠着的な接辞の変換ではなく、全く共通要素のない、別々の語彙の集合なのである。格の視点から見れば、性数横断的に、主格では男・中・女複の3種、属格では男中・女複の2種、与格では男中・女・複の3種、対格では男・中・女複の3種になる。『(3)』で見たように、主格と対格はパターンが同じである。性・数・格をクロスさせると、男1、中1・4、女複1・4、男中2、女複2、男中3、女3、複3、男4の9ブロック=9形が存在する。形の上では9種を区別すればよいのである。

### 1. 2. 女性と複数

sie/dieとは何か。不定冠詞類を見れば語尾-eを取る所にある。指示性のあるsやdの音節基盤としての母音要素が後ろへ(語尾として)拡張したものである。同音異義として、「彼女」ないし「彼ら」であるのではなく、それらをつなぐもの、すなわち母音が後ろへ拡張した複合的な形式をとるものを指すことが本来なのである。

『(3)』では、古高ドイツ語、中高ドイツ語に触れて、複数においてもかつては性別があったことを述べた<sup>2)</sup>。通時的に拡張することは、レベルを変えることと同じである。新高ドイツ語では、男性のみ1/4格の区別があるが、中性(無性)/有性の対比から見て、複数・中性対女性・男性の区別がより本質的である。文法性は第一義的には自然性ではないものの、生物の比喩はある程度は当

てはまるものと思う。有性とは意思を持ち、主体となるものである。少なくとも活動体である。無性とは「物」であり、専ら対象である。主格と対格が同形であるとは、対格が主格と同じなのではなく、主格が対格と同じなのである。

古高ドイツ語の 3 人称代名詞、複数 1・4 格は、男性：sie、女性：sio、中性 siu である。問題は女性単数主格が siu であることである。女性単数対格は sia または sie であり、この sie から男性複数 1・4 格との混交が始まり、同一化が進む。新高ドイツ語に引き継がれているように、S + 母音方式は単数女性と複数全部に共通するものである。女性内部では単数／複数の差異がなくてはならないから、siu/sio のように差異があるのは頷ける。むしろ女性形と複数形に共通したところがあることが重要であって、複数の原点は中性形 siu である。この現象は、数の壁を乗り越えていると同時に性の壁も乗り越えている。現在における sie の意味も性や数にあるのではなく、共通した形式にあるとせざるを得ない。

接尾辞が付く名詞は多くが女性になる。このことを捉えるのに、少し寄り道をする。接尾辞には、曖昧母音を持つもの：-e, el, -em, -en, -er, -es、曖昧母音以外の母音から始まるもの：-ung、子音から始まり、語としての痕跡を残すもの：-heit(-keit), -nis, -schaft, -tum などがある。頭子音を持つか否かの重要性は、ドイツ語において、母音（字）から始まる自立する形態素は声門閉鎖のあることが知られているからである。音としては認知されにくい声門閉鎖（音）を子音とすれば、自立した形態素は必ず子音を初頭に持ち、母音から始まることにならないことになる。母音から始まれば、それは必ず接尾辞である。音節としては、先行要素の末尾子音を頭とする音節を形成する。単純な例を挙げれば、Tage は音節としては Ta-ge であるが、要素から言えば Tag-e である。Tag-e を抽出できるのは、無論、Tage が Tag の複数形だからである。ところがプロセスは一挙には進行しない。確かに Tag に -e が付加されれば複数であることは理解される。しかしそれだけではなく、他に多数の語が -e が付加されて複数形になることがあって初めて -e が複数形の接尾辞として認知される。単数／複数という意味、ないしは機能そのものは、目に見えるかたちで捉えることができない。単数形と複数形は別の語であって、他の意味だとも言える。ただ、Tag は何かある X の単数形であり、Tage は何かある X の複数形であるという形式は認められる。抽象的な見えない X を媒介にしなければ、単数／複数では認識できない。

この X を媒介にして、複数形の中に単数形 + e が多く含まれることが理解されて初めて、-e は複数形を作る接尾辞（形態素）として認められるのである。一方、女性名詞を作ると簡単に説明される -ung は、そのようには把握できない。例えば Achtung は achten の（女性）名詞形と捉えることは正しく、通念上、何の問題も生じないが、はたして、Achtung と achten はどのように繋がっていると言えるであろうか。動詞 achten は人称変化等（活用）をするので、比較的容易に achten と achte, achtest, achtet は関連づけられる。それでも、これは現在形の変化であるから、X を媒介として、例えば過去形と対比されて現在形であることが認識されたとした上で成立する。そこでようやく -n が（不定詞の）接尾辞として存在しうるのではないか程度のことが分かる。ここまででは achten は achte-n という要素からできていることになる。Achtung とは非常によく似た綴り（音）のできていることは分かるが、まだ遠く隔たっている。

これはいわゆる口調上の e を含む例で、意図的に複雑化したきらいはあるが、単に名詞形／動詞形と言っても何をもって関連すると言うのかは難しい問題である。仮に不定詞語尾 -en まで行き着いたとしよう。そうすれば、語幹部分は共通の a(A)cht である。自立した形態素として存在しうることの

証拠である単音節語の *acht*, *Acht* もある。だから *acht-en*, *Acht-ung* であるとはならない。*Achtung* の標準の分綴は *Ach-tung* であり、従って最も一般的な音節も *Ach-tung* である。しかし音節の可能性は、制約を無視すれば、音素に従って、*A-chtung*, *Ach-tung*, *Acht-ung* の3種あり得る。この内、*A-chtung* は、既に『ドイツ語音韻把握の諸相(1)』で見たように、本来の発音であれば、ここでは *cht* は [xt] と発音されることになっている。まれに [çt] はあるが、音節頭では原理的に [xt] はない。一方、*Acht-ung* は音節で切ろうとすると、-ung は u の前に声門閉鎖を必要とする。従ってここでは切れない。ということは *Ach-tung* しかない。

それにもかかわらず、-ung を接尾辞とする根拠を求めるとすれば、意味に依拠するしかない。素朴に観察すれば、明らかに意味で繋がっているように見える。しかし「意味」はいわば連続体であって、分節することは難しく、同じような意味であっても等しいとは言えず、遠く隔たって見える意味であっても関連がないとは言いつれない。*Maulwurf* 「もぐら」の *Maul* は中高ドイツ語の *mu* 「土塊」であって、現行の *Maul* 「口」とは違うが、通時的に語源などを探索しなければ区別は付かない<sup>3)</sup>。「もぐら」の *Maul-* も今は音韻として「口」に繋がっているとも言えるのである。-ung について分かることは、音節の切れ目がどうであれ、-ung に終わる語は女性名詞であることが非常に多い、ということなのである。-ung を接尾辞として認めることは厳密にはできないが、傾向として間違いではないから、実質上、接尾辞として便利に使うほうがよいのである。

このように、-e と -ung には性質の違いがあり、-e は複数形の接尾辞であると明白に認められるから、音韻的には自立はしないが、明らかに形態素であって、-ung は傾向を示しているに過ぎない。しかし学習上は逆に接尾辞としての -ung が付く語は必ず女性名詞であり、単数において -e の付く語は、これも極めて頻度が高いものであるが、傾向として女性名詞である、という言い方になる。なぜ複数と女性の代名詞が同じであるかについては、-e が最も示唆に富む。

女性名詞も複数名詞も接尾辞性の音節がついていることが多いのである。しかし接尾辞によって、男性名詞・中性名詞が形成されることもある。接尾辞は性にこだわらない。複数語尾は明白に抽出されたという前提で論を進める。すなわち、ドイツ語においてメインの複数形の成り立ちは、初級の必須事項で学習するように、①無語尾、②-e、③-er、④-(e)n、⑤-s の5種に分けるのが一般的である。④-(e)n に既に問題の片鱗がのぞいている。①は単数において既に接尾辞的な音節、-el, -em, -en, -erなどを備えている語であり、⑤-s は外来語や略語など、本来の複数形を持たない語に便宜的に付けられたものである。『ドイツ語構造把握の諸相(1)』で指摘したように、ドイツ語においては接尾辞の種類は比較的少なく、使い回しのようにになっている。複数形語尾も、いわば語形成接尾辞とでもいうものも、元来違いがない。②～⑤の語尾付加型において、母音を付加するのは実は②だけである。

①を見れば分かるように、前に曖昧母音を含む音節がある場合には -en ではなく -n を付加する。実際には *Insel-n*, *Schwester-n* のように、el-n, er-n が専らである。『ドイツ語音韻把握の諸相(2)』で見たように、鳴音には順序があり、鼻音が最後に来る。m と n は並び立たない。r が先、l が後である。③は必ず -er になるが、これは r が母音の最も近くに位置し、他の鳴音が挟まることがないからである。いずれにせよ、鳴音による複数形は、音節を増やすことがその本質ではなく、音が付加されることが重要である。曖昧母音系において音節を付加することが本質であるのは、-e だけである。女性名詞を作る接尾辞の代表的なものは、-ung の他に -schaft, -heit などであるが、名詞の性質を帯びているかとはかく、これらは音節を増やしている。曖昧母音 -e を加えて、女性名詞の形式上の多数派は音節

性の接尾辞を備えていることである。

ここでようやく代名詞の形に行き着く。名詞が女性であることを形だけで判断しようとすれば、このように母音によって語幹から後ろへ音節が延びているような形であって、その形を人称代名詞／指示代名詞 (定冠詞) は写しているのである。一方、複数形は、単数形が単音節であると音節を増やし、元々複音節であると子音を付加する傾向がある。これも音が増えることが共通し、細かい差異を捨象すると、ほぼ同様な形をしていると言える。この適度に曖昧さを持った形こそ *sie* である。

無論、女性名詞はこのような形ばかりではない。形から厳密に性を判別するのは不可能である。本来、複音節を持つものを女性と名付けたとしても、その中には自然性が女性であるものが多く含まれている。むしろ、女性であるものの中心的形式が複音節であったからこそ、この形式を女性名詞と呼ぶのである。そうするとその形式を備えないものであっても、女性という特性を指示する語であれば、女性名詞となり得るのである。あらゆる要素について、少数派が駆逐されて多数派に同化して行く傾向にある。

### 1. 3. 性と数の交差

女性名詞と複数名詞は形式的には同じ成り立ちをしていることが、代名詞の共有から帰納されることである。同様に代名詞 *er* から接尾辞 *-er* は男性名詞を作るといえる。複数語尾 *-er* はもともと少数派であるが、その内の多くは中性名詞を複数にする。これが示唆するのは、中性という、本来は名詞の性を持たない (無性の) 核を男性にする働きである。男性化は音素として *r* が付加されることによって実現するのであって、音節が増えることは本質ではない。むしろ、音節増加は女性名詞ないし複数名詞化を意味する。前述したように、末尾の *r* は前に母音を要求するので、音節増加が付随してしまうのである。

*-er* は一方で男性名詞を作る接尾辞として定着している。職業、地位、身分、立場などを表す語彙について男性を表す。その典型例は *Lehrer* 「教師」などである。*Lehrer* は、勿論 *Lehr-er* と捉えるのが一般的であるが、*-er* を前提にして登場してくる *lehr-* という形は、*Lehrmaterial* 「教材」などにあって、当然すぐに了解できると予想されるが、*lehr* という単音節は、*lehren* の命令形にあり、直接は繋がらない。名詞 *Lehre* があり、*-e* という、いわば接尾辞というよりは、拡張子のようなものが認められて初めて *Lehr-e* が成立し、*-e* の着脱が可能となる。*lehr* という語根に *-e* が付加されて女性名詞ができていたのである。*Lehrer* だけの問題であれば、*Lehre-r* でもよい。これは、動詞内部にも見られる現象である。*sagen* は、本来ならば、*sage-n* であり、*reden* は *rede-n* である。一方 *arbeiten* は *arbeit-en* である。口調上の *e* を巡る 3 種の対応が見える。名詞 *Sage* は *Sag-e* であり、動詞としては *sag-en* としても同じであって、語根末が *g* なので口調上の *e* は要らない。*reden* は *rede-n* もしくは *red-en* であるが、語根末が *d* なので口調上の *e* を必要とすることとなった。*arbeiten* は、語幹が *-t* に終わるので口調上の *e* は必須である。語幹内の接尾辞的部分は特殊なものであるが、音節増加などによって、女性形成の典型例である。

もう一つの典型が親族名称である。親族名称全体は様々な様態の名詞からできており、必ずしも多数を占めているわけではない。*Vater*, *Mutter*, *Bruder*, *Schwester*, *Geschwister*, *Tochter*, *Vetter*, *Schwager* でほぼ網羅されるであろう。親族名称にはこの他に、フランス語由来の *Onkel* が *-el* を持ち、*Sohn* の語幹 *n* もある。女性名詞 *Nichte*、男性弱変化 *Neffe* など、一通り揃っている。ここでいわゆる二親等ま



でに絞ると、親の世代が、Vater, Mutter, Eltern、同世代が Bruder, Schwester、まとめて中性化（複数化）すると Geschwister (Gebrüder)、子の世代は Sohn, Tochter, Kind となり、少なくとも現在のドイツ語において語根形式であるのは、Sohn と Kind である。

語根末の d は破裂音であるから、n から継続する閉鎖部分で音節は完成し、破裂は剰余部分である。母音を伴わないので、音節にはならないが、次音節の開始点であると言える。変化形を備える jemand などにも見られる現象で、いわば変化語尾の接着装置のような働きをしている。すなわち -nd は -n の拡張形と捉えることができる。

直系の親族においては、Sohn と Kind のみが語根型で、n 終端である。ここでは意味の系譜を探るのではなく、形をより原型から探っている。すると最も基本的な構造をしているのは、Sohn と Kind である。男性と中性は共に -n 型であるが、女性 Tochter が -er 型であることは示唆的である。すなわち何かしらの音節増加は女性形を生み出す。しかし同時にそれは類を表す接尾辞を選択している。必然的に意味の領域に踏み込んでしまうが、もし階梯を考えるならば、最も基本的には「子」がある。「子」だけははっきりと自分に由来（自分の所有）するものである。後の関係は初めからそこにあって、そのように名付けられたものであるか、後から来たものであっても、自分の所有ではない。表面上の語形としては共通点はないが、両性の Kind の男性が Sohn である。女性は何らかの語尾が付き Tochter という形をなす。語根部分は tocht- であり得るが、tocht- に -er が付いたものというような分解が困難であるものがむしろ親族名称である。他のあてがわれた関係の親族名称は、その意味では二次的であって、-er の標識を付けて親族名になる。そして自然性に従って性を割り振られる。

一方の職業名のほうは「ある行為をする者」をカテゴリー化している。動作を表す名詞、より形式的に言えば、過去形などを含む動詞の語幹がそのまま名詞に転換すると、男性となることが多いが、語幹そのものには性はない。このようなものに「行為者」の類を表す -er を付けると男性になる。この男性性は [-女性] 素性としての男性であり、 [+女性] にするには -in を更に付加する必要がある。非曖昧母音の -n 型であるから、音節形成型である。意味から言えば人を指しているわけであるから、当然 -in は男性名詞に付くのであるが、男性に付加するということではなく、男性名詞を新たな語幹としてその音節を増やす n 型接尾辞である。音節を増やすことによって、女性名詞の体裁を整えることと、自然性によって女性名詞であることを選択することが相互に作用している。その結果、女性を表すのに -in を付けて、それは当然のように女性名詞である、ということが起こる。

類を表す -er は容易に複数形へ転化しうる。ちょうど「子供」がもはや複数とは感じられないのとは逆のプロセスである。「子供たち」と言うように、英語の children は -r の他に -n まで登場してようやく複数らしさを獲得している。

行為から行為者を構成する接尾辞 -er はますます生産性を増し、人であって、女性ではないという意味から実質的にこの場合は男性名詞を作る接尾辞として確立する。指示性のある音素 s を前方に拡げて代名詞となった es に対して第 2 の指示的音は r であり、これが er となる。ここで es, sie, er が揃ったことになる。ここから発展する数格体系も、それほどかけ離れた現象があるわけではない。それどころが最も対比の対象になるかが問題である。これは何か本質的なものがあるわけではなく、結果として、何かしらの模様が見えるということなのである。以下は『(3)』で取り上げた体系の見取り図である。人称代名詞の体系は、語根 + (母音) + 鳴音 / (c)h の構成で見ると、冠詞の基本母音と

なった e を原点として、ich=Ih, meiner=Mnr, mir=Mr, mich=Mh, du=D, deiner=Dnr, dir=Dr, dich=Dh, er=R, seiner=Snr, ihm=Im, ihn=In, es=S, sie=Se, ihrer=Irr, ihr=Ir, w=v=u と置くと、wir=Ur, unser=Unsr, uns=Uns, eu=Y と置くと、euer=Yr, euch=Yh, ihnen=Inn のようにまとめられる。

定冠詞 (指示代名詞) から見れば、der の区別を母音に頼り e/i の対比がある。原点が das であるとする、2 次的な 2 格は a → e の e 化によって差異が生まれている。人称代名詞系では s を後ろ伸ばし n と r を重ねる構造を持つ。1/2 人称複数では -r を保持しており、wir の場合は u と i を重ねている。語尾変化に使われるのは、基本的に e であるから、曖昧音ではない、主音になり得る e が最もニュートラルな基本の位置であるとする、と分かりやすい。曖昧音は色々と混合しているが、主系列上に最も曖昧音に近いところにある e を中心にして、狭くして i、広くして a、後方で狭くしていくと o や u に至る。

当初音が e であると、音節末性の指示素、すなわち R, S などが前方へ拡張して音節をなすことになり、後方へ延びると女性型になる。2 人称単数は、冠詞類と同様 D を指示音としているが、de, da 系は 3 人称的な指示詞の役割があり、代名詞の原点とも言える 2 人称代名詞としては母音を大きくずらして、du になる。2 人称単数は d-u, d-einer, d-ir, d-ich のように全て d- を持っているから、d- が基本であり、それが後ろへ拡張している。

2 人称複数の場合は、基本は eu であるが、これを英語との共通性を生かして簡略的に Y とする。これが主格では i になる。1 人称も語源は無論異にするが、同じ i になっている。母音の指示素をいわば固定するのに堅い摩擦音の H(ch) が用いられているが、それでも、1 人称単数と 2 人称複数とは同音 (IH) であり、2 人称複数では更に -r を必要とすることになった。本来は Y の異音のようなものであるから、ihr は Yr と記号化してもよく、同じく wir も uns から見て、Uir に他ならないが、更に簡便のため、Ur とすることが考えられる。

ここで様々な分類ができる。人称の指示素から言えば、I : ich, ihr, ihrer, ihm, ihn、M : meiner, mir, mich、D : du, deiner, dir, dich、R : er、S : seiner, sie, es、U : wir, unser, uns、Y : euer, euch。このようにまとめると、普段の変化表とは異なる相貌がある。これに合わせて、末尾子音の分類ができる。-ch, -m, -n, -s がどこに付いているかを分類すると、ことなる組み合わせになる。そのこと自体に大きく意味を持たせることはできないが、少なくともそのような組み合わせによって要素数を増やすことに貢献している。そこに大きな違い、小さな違いというような、ステータスないしは性質の階層のようなものを抽出すれば、新たな構造を見ることができる。

## 2. 中間まとめ

我々は native speaker でないだけ、外国語の例えば語の意味を分析して把握しているということがあつた。このことこそ、外国語学習の最も根本的な学びであるかもしれない。例えば助動詞 müssen について、英語の must の学習と同様に、①ねばならぬ、②に違いない、などと整理して覚えようとする。外国語学習とは多少ともそのようなものであり、そうせざるを得ない。しかし、müssen は müssen であつて、それを分解しようとしても出来るものではない。そこにある陥穽は、学習が進めば、多少分類を細かくしていくことはできる。しかし müssen の意味はその意味項目の総和ではない。単純化して言えば、müssen の意味は①ねばならぬ+②に違いない、でできているのではない。意味の広がり

において重なっているものの、①でも②でも、ただ単なる①+②でもない。何か別のものである。しかし、このような分類学習は誤りではない。我々はそのようにしか学習できない。

重要なことは、単に総和ではないということ意識することであり、それは、かねてより主張している言語への感受性を養うことなのである。言語は外国語で記述されて初めてその相貌をあらわすところがある。同一言語内にあっても、例えば語の意味とは、他の語で説明されたものである。しかし、語1 = 語2 ということはない。意味は常に「おおよそ」であり、それとして把握できるものではない。

このことは外国語に限らず、言語学習の本質的な問題をなしている。語の意味の領域を円で表すとすると、当該の語の意味とは、その他のできるだけ多くの語の意味領域円の重なりとしか言い表すことができない。またそれぞれはそれぞれの領域の可能な限りの重なりにはならない。例えば語のような言語の一要素は意味を持たないとさえ言える。それらが持っているように見えるものは、例えば文法機能である。名詞なら性数格を持つなど、かろうじて焦点を結び得るような「意味」がある。言語であるためには、単なる音声や文字に意味が乗る必要がある、その「意味」を把握可能な形、すなわち文法機能に還元して考える必要がある。そこに出てくる構造がまた、意味をなすのである。

外国語を知るということ、これは喩えていえば、一つの語を他の語で言い換えることができるということと同じことを指す（少なくとも含む）が、これが意味するところは、単純に言って、A という語を B という語で言い換えることができるとすると、等しいことはないのであるから、元の A という語は A かつ B である部分と A ではあるが、B ではない部分があることを知るということである。これが言語学習の根幹である。究極的にはこれらの部分に対応するいわば「語」はない。外国語を知るということ、あるいは言語を深く知るということは、言語を失うことと等しいのではないかとさえ思われる。言語学習の一つの方向は間違いなくこちらを向いている。筆者が分析的学習、本来の意味での言語学習としたのはこれである。

しかしこれでは手段としての言語学習にはならない。コミュニケーションを学ばなければならない。コミュニケーションを学ぶとは他者の言語で自らの意思を伝達することである。自己の言語は A を指向している。しかしそれを説明するのは B である。コミュニケーションの学びとは、A=B と決断することの学びである。A=B ではないことを意識しながら、なるべく近似値をたどって、実質的に A=B を実現する努力がコミュニケーションの学びなのである。そのことが最も重要なことであるが、A=B ではないことを忘却してしまう危険に警鐘を鳴らし続けるのが本論の主旨である。

— 続く —

#### 註

- 1) 宮永義夫, 「ドイツ語構造把握の諸相—学習の現場ノート— (3)」, 『山梨大学教育人間科学部紀要』, 第 13 卷, 2011, pp256-263.
- 2) 古賀允洋, 『中高ドイツ語』. 大学書林, 1982, pp.64-65.
- 3) 国松孝二他編, 『独和大辞典 第 2 版』. 小学館, 2000, p1503.